

(論文)

オスカー・ワイルドの「漁師とその魂」 網にかかったアニマとしての人魚

星野英樹

キーワード

精神分析 ユング オスカー・ワイルド 漁師とその魂 アニマ

はじめに

オスカー・ワイルド (Oscar Fingal O'Flahertie Wills Wilde, 1854-1900) の短編集『石榴の家』(A House of Pomegranates, 1891) は、『幸福な王子その他』(The Happy Prince and Other Tales, 1888) と比べてもより大人向けであり、その『石榴の家』に収録されている「若い王」(The Young King)、「王女の誕生日」(The Birthday of the Infanta)「星の子」(The Star Child) に比しても、「漁師とその魂」(The Fisherman and His Soul) は、ワイルドのすべてのおとぎ話の中でもっとも「複雑 (complex)」で解釈が難しい作品として紹介されている。たとえば、一般読者が手に取りやすいオックスフォード大学出版局のWorld's Classicsシリーズでは、「精神と肉体、美と善、地上と天国の対立を扱う最も野心的で複雑な作品」¹⁾と解説され、同様に、広く読まれているペンギンブックスの解説でも、アンデルセンの『人魚姫』やマシュー・アーノルドの『捨てられた男人魚』等と並べて、「最も複雑な、ある種のパロディ」²⁾と評されている。

本稿は、洋の東西を問わず、読者を魅了し続けてきた人魚伝説の中でも、現在の映像作家までもその不可思議な魅力で虜にするオスカー・ワイルドの「漁師とその魂」を対象に、主として精神分析理論を援用しながら、「魂」と「人魚」の関係にまつわる「複雑さ」の解明に考察を加えることを目的とするものである。また、その「複雑さ」のなかにも文学、芸術作品としての確固たる様式の伝統が受け継がれていることを確認し、同時に、漁師の「釣る」という行為が孕む文学的象徴性への論究を通じて、この「複雑な」作品に新たな解釈を与えることを企図するものである。

第1章 繰り返しと「3」と音声

「人魚」が登場するおとぎ話としてはアンデルセンの『人魚姫』が広く知られており、そのあらすじは改めてくり返す必要はないであろうが、同じ海の妖精が登場するワイルドの「漁師とその魂」については、論の展開上、物語を詳らかにしておく必要がある。

以下は、ある研究書に要領よくまとめられた「漁師とその魂」のあらすじである。

ある1人の若い漁師が美しい人魚を捕らえ、呼び寄せたら必ず来る、という条件で放す。毎晩、人魚が漁師に海の神秘の物語を歌ってきかせると、漁師は人魚に夢中になるが、漁師に魂があるかぎり、結婚できないと言う。牧師は、漁師に魂の捨て方を尋ねられると恐ろしくなって、漁師と人魚を非難する。商人たちには漁師の魂に価値など無いと言われ、市場で魂を売ろうとする努力も無駄に終わる。ついに漁師は若い魔女を見つけ出し、自分の影を切り離すように言われる。漁師が魔女の指示どおりにすると、魂は泣きながら立ち去り、漁師は海の底の人魚といっしょになる。毎年、魂は舞い戻ってきては漁師に冒険談を語り、知恵と富で誘惑する。

3度目にやって来たとき、漁師は素晴らしい踊り子がいるという話の虜になり、魂と一体となる。魂は、人魚にあずけたままで心がない漁師に悪事を働かせる。漁師はふたたび魂を捨てようとするが、捨てられるのは一度きりであることを知る。絶望した漁師が、魂の誘惑に逆らって岩場で人魚を待っていると、人魚の死体が打ちあげられる。漁師は人魚を抱いて死に、魂と心は一つになる。牧師の指示で漁師と人魚は神を冒涇した者の地に埋葬される。3年後、祭壇に漁師と人魚の墓に咲いていた花が咲くと、牧師はそれまでに自分のしたことを悔やむ。その後、墓にふたたび花が咲くことはなく、海の民たちは海のどこかに行ってしまう。³⁾

このあらすじからでも、19世紀前半のヨーロッパを代表するアンデルセンの「人魚」とワイルドの世紀末的な彩りが濃厚に加えられたそれとの差異は明瞭である。つまり、「人魚」が「歌」で男性を魅惑する序章、願望を実現するために交換条件を提示する魔女の登場、人魚が死ぬ結末、魂をめぐる挿話等は、アンデルセンの物語との類似性を示しているのに対し、ダンスと踊り子の挿話、魂の語る絢爛たる絵巻物風の冒険談、神秘的な花の描写などには極めてワイルド的な耽美的表現がみなぎっており、その創造性がゆえにこの小編を難解にし、「複雑さ」を生み出していると言える。

まずは、後に触れる語りの様式上の特徴として、劈頭に表れる「くり返し」に着目し、同時に展開される重要な交響的テーマ群を俯瞰して明らかにするために、長文ながら、冒頭からの主題提示部をそのまま引用する。

EVERY evening the young Fisherman went out upon the sea, and threw his nets into the water.

When the wind blew from the land he caught nothing, or but little at best, for it was a bitter and black-winged wind, and rough waves rose up to meet it. But when the wind blew to the shore, the fish came in from the deep, and swam into the meshes of his nets, and he took them to the market-place and sold them.

Every evening he went out upon the sea, and one evening the net was so heavy that hardly could he draw it into the boat. And he laughed, and said to himself 'Surely I have caught all the fish that swim, or snared some dull monster that will be a marvel to men, or some thing of horror that the great Queen will desire,' and putting forth all his strength, he tugged at the coarse ropes till, like lines of blue enamel round a vase of bronze, the long veins rose up on his arms. He tugged at the thin ropes, and nearer and nearer came the circle of flat corks, and the net rose at last to the top of the water.

But no fish at all was in it, nor any monster or thing of horror, but only a little Mermaid lying fast asleep.

Her hair was as a wet fleece of gold, and each separate hair as a thread of line gold in a cup of glass. Her body was as white ivory, and her tail was of silver and pearl. Silver and pearl was her

tail, and the green weeds of the sea coiled round it; and like sea-shells were her ears, and her lips were like sea-coral. The cold waves dashed over her cold breasts, and the salt glistened upon her eyelids.

So beautiful was she that when the young Fisherman saw her he was filled with wonder, and he put out his hand and drew the net close to him, and leaning over the side he clasped her in his arms. And when he touched her, she gave a cry like a startled sea-gull and woke, and looked at him in terror with her mauve-amethyst eyes, and struggled that she might escape. But he held her tightly to him, and would not suffer her to depart.

And when she saw that she could in no way escape from him, she began to weep, and said, 'I pray thee let me go, for I am the only daughter of a King, and my father is aged and alone.'

But the young Fisherman answered, 'I will not let thee go save thou makest me a promise that whenever I call thee, thou wilt come and sing to me, for the fish delight to listen to the song of the Sea-folk, and so shall my nets be full.'

'Wilt thou in very truth let me go, if I promise thee this?' cried the Mermaid.

'In very truth I will let thee go,' said the young Fisherman. So she made him the promise he desired, and swore it by the oath of the Sea-folk. And he loosened his arms from about her, and she sank down into the water, trembling with a strange fear.

Every evening the young Fisherman went out upon the sea, and called to the Mermaid, and she rose out of the water and sang to him. Round and round her swam the dolphins, and the wild gulls wheeled above her head.⁴⁾

夕暮毎に、若い漁夫は、海に出かけて行つて、網を投げました。

風が陸の方から吹くときは、少しの獲物もありませんでした。よし、あつてもほんの僅かでした。と、いふのは、陸の方から吹く風は、烈しい、黒い翼のある風で、その上荒い浪がそれに和して逆巻き上るからでした。しかし、風が岸の方へ吹くときには、魚は、海の深みから浮み出て来て、彼れの網の目の中に泳ぎ込んで来ました。かうして、彼れはその魚類を市場に持つて行つて賣るのでした。

夕暮毎に、彼れは海に出かけて行きました。とある夕べのこと、網は大へんに重くて、船の中に入れることが出来ないくらいでした。で、彼れは笑ひながら、獨語を云ひました。「俺はきつと、泳いでゐる魚をすつかり捕へたにちがひない。でなければ、人間には不思議に思はれるやうな何かの怪物か、それともあの女王さまのお好きな何か怖い物でも捕へたにちがひない。」かう云ひながら、丁度、青銅の壺の周囲の青い珉瑯の線のように、長い血管がその兩腕に腫れ上がるまで、彼れはありたけの力を出して網の太い繩を曳きました。それから細い繩を手繰ると、だんだんに、平たいコルクの輪が現はれ、やがて網が水の上にはらはれて参りました。

しかし、魚は一疋も入つてゐませんでした。又、怪物らしいものも恐ろしいものも一つも入つてゐませんでした。たゞ、一つ小さい人魚がぐつすり睡込んだまゝ入つてゐました。

人魚の頭髮は濡れた黄金の羊の毛のやうでありました。そしてその一筋々々の頭髮は硝子の杯の中の美しい黄金の糸のやうでありました。また、その身體は白い象牙のやうで、その尾は白銀と眞珠とで出来きたものゝやうでありました。そしてこの白銀と眞珠のやうな尾には緑の海草が捲きついてゐました。また人魚の耳は海の貝殻のやうでありました。またその唇は珊瑚のやうでありました。冷たい浪は人魚の冷たい胸のあたりにひた／＼と打ちつけ、鹽は人魚の眼瞼の上に

ぎらへ〜と輝いてみました。

人魚は大へんに美しかつたものですから、この若い漁夫は、一目見て、あつと驚きました。そして手を延べて、網を自分の傍に引きよせ、舷に乗り出して、両手でしかと人魚を掴みました。彼れが人魚に觸つたとき、人魚は驚いた海鷗のやうな叫び聲を挙げ、その紫水晶のやうな眼に驚きの色を湛へて彼れを見て、逃れようと身を悶きました。しかし、彼れは、しかと人魚をおさへてゐて離してやらうとはしませんでした。

やがて人魚は、逃れ去る道のないことがわかると、泣き出しながらかう申しました。「どうぞわたしを遣つてください。わたしは王様の一人娘でございますが、お父さまはもうお年寄りで、それに一人ぼつちでいらつしやいますから。」

しかし若い漁夫はかう答へました。「もしお前が、いつでも俺れがお前を呼ぶと、出て来て歌を歌ふといふ約束をしなけりや、許すことは出来ない。と、いふのは、魚が人魚の歌に聞き惚れるので、俺れの網が自然と一ぱいになるといふわけだからさ。」

「わたしがお約束をすると、ほんとうに、あなたは許して下さいの！」と、人魚は叫びました。

「ほんとうに許してやるよ」と、若い漁夫は答へました。

そこで彼女は、彼れの望む通りの約束をして、そしてそれを人魚の眷族の誓ひにかけて誓ひました。で、彼れは、手をゆるめました。と、彼女は、不思議な恐れで身體中をぶる〜震はせながら、海原深く沈んでゆきました。

夕暮毎に、若い漁夫は、海に出かけて行って人魚を呼びました。すると、彼女は水の中から浮かび上がつて来て、彼れのために歌を歌ひました。彼女の周囲にはあまたの海豚が泳ぎまはり、彼女の頭の上には鷗がぱた〜と羽搏をしながら飛び廻りました。⁵⁾

上記引用部分で先ず目にとまる様式上の特徴は、'Every evening' の繰り返しである。「メルヒェンの様式上=構成上の特徴のうち、もっともめだつもののひとつは、くり返し之法則である」と説くリュティは、そのくり返しについて以下のように解説している。

なじみのものがくり返しあらわれると、聞き手も語り手も安心感をおぼえる。またそれは同時に構築的な効果をうむ。すなわち、形を作り、全体像を作り、構造を作る効果である。技術的必然性が美学的効果と心理的反応をひきおこすのである。このことは単純な散文の民間伝承についていえるばかりでなく、高度な文学作品に数えられる口承の韻文叙事詩についてもいえることである。

4 くり返しは、同じことのくり返しであれ、ヴァリエーションをもったくり返しであれ、普遍的法則である。それは宇宙的現象にも妥当するし、人間の一生、芸術、文化にも妥当する。昼と夜や夏と冬の交代と再来、植物、動物、人間の眠りと覚醒（見かけだけとはいえ）太陽と月の規則的交代、規則的におきる空腹とどの渴き、そしてそれに応じてくり返される時間のきまった食事儀式、儀式と儀礼習俗一般、毎年くり返される祭。一日の経過にしても、その外面的な形としては前日の経過のくり返し—模倣といつてもいいが—にすぎない。⁶⁾

段落の頭に置かれた 'Every evening' の繰り返しは、「漁師とその魂」が、文字媒体が広まる以前の口承文芸の伝統を汲んだ作品であることを強く印象づけると言えよう。繰り返しの伝統の踏襲は、この作品に限らず、他の短編にも見られるが、それはワイルド自身が自分の子供に語ってき

かせた必要性や、両親の民話収集の影響と深く関わっている。漁師が人魚の歌に魅了されるように、文字を介してではなく、直接、耳に入る音声が醸す美しさ、音楽的な美については敢えて縷言は要さないであろうが、ウォルター・オングの『声の文化』からの適切な引用を交えた以下の論文の1節は、人魚の美声と無文字文化の伝統が、劈頭の繰り返し表現の意義や物欲と美意識の相克について、示唆に富む解説を加えている。

「肉体への愛」は、テキストのこの箇所では、ほとんど誇張されてはいない。結局のところ、漁師が恋におちるのは、ほとんど描写されていない人魚の肉体的魅力ではなく、人魚が語る地下世界の美しくてすばらしい物語で表現されている、人魚との別の生き方なのである。ウォルター・オングは、口承文化においては、記憶できるのは美しくて磨き抜かれたフレーズだけであるため、文字を持つ文化以上に、話される言葉には多くのことを言い表せる能力が備わっていると指摘している。文字を持たない文化は、記憶がしやすくなるように知識を整理しなければならない。そのため、

一次的な声の文化では、よく考えて言い表された思考を記憶にとどめ、それを再現するという問題を効果的に解くためには、すぐに口に出るようにつくられた記憶しやすい型にもとづいた思考をしなければならない。このような思考は、つぎのようなしかなかで口に出されなければならない。すなわち、強いリズムがあって均衡がとれている型にしたがったり、反復とか対句を用いたり、頭韻や母音韻をふんだりして……難なく思い出せ、記憶をたすける形式にしたがったりすることである。⁷⁾

こうした想像力みなぎる読み書きができない状態は、この作品の人魚の物語にみごとに描き出されている。人魚はまさに生けるおとぎ話そのものであり、「現代世界こそがありえない時代錯誤を犯していると思わせる」働きをする。(ロドニー・シーワン著『オスカー・ワイルド』63ページより引用) 金銭への愛から漁師を奪還するには、語る力が必要なのだ。それまでの漁師の生活ぶりは、市場からの要求に支配されていて、当時のアイルランドに勃興し始めたカトリックの中間層そっくりである。⁸⁾

引用部だけでは伝えられず、あらすじで若干うかがえるのが、様式上のみならず作品の中での象徴的機能の点からも極めて重要な「3」という数字へのこだわりである。魂が「知恵」「富」「踊り子」で漁師を誘惑する回数や物語を構成する3要素「肉体」「魂」「漁師」の鼎立をはじめ、「3」が表出する箇所は以下のように枚挙に暇がない。

the young Fisherman went to the house of the Priest and knocked three times at the door. (174)
「若い漁夫は坊さんの家に行つて、戸を三度叩きました。」

5

three spotted birds rustled through the coarse grey grass and whistled to each other. (177)
「斑点のある鳥が三羽、灰色の草原のなかにさら／＼と音を立て、立ち現れながら、お互ひに囁き交わしました。」

Three jackals came out of a cave and peered after them. (182)

「三疋の山犬は洞穴から出て来て彼等のあとをきよるへ見てみました。」

Three times in our journey we came to the banks of the Oxus. (183)

「三度わたしたちはオクサス河の岸に出て来ました。」

They set down the palanquin and knocked three times with a copper hammer. (188)

「彼等は乗物を下ろし、銅の槌で、戸を三度叩きました。」

And three hours before dawn, and while it was still night, his Soul waked him, (194)

「やがて夜の明ける三時間前、まだひつそりとした夜でしたが、靈魂は彼れを目覚めさせて」

後に詳述する漁師と網の象徴への言及を含め、「3」という数字に注目する重要性は、以下の論文からも明らかである。

漁師が海に網を投げるという聖書を模倣した冒頭のイメージは、展開される物語の宗教的暗示に読者の注意を促す。しかし、そのイメージは『アラビアンナイト』の「漁師と魔神」の物語の影響も反映している。地域性と広域性を備え、語りの伝統と文学の伝統を融合させた「漁師とその魂」は多種多様な文化的潮流の合流点に位置しており、そうした潮流が混じり合って、決定的な解釈を寄せ付けないのである。

この物語は、善と悪、肉体と魂、救済と破滅の二元的対立を無効にするために民話の3の繰り返しを明示している。魂は漁師を知恵、富、肉体の完璧さで誘惑するため、3つの強力な炎が欲望の火花を散らす。文章の構成も、この3連の分割を響かせている。

He tugged at the thin ropes, / and nearer and nearer came the circle of flat corks, / and the net rose at last to the top of the water. But no fish at all was in it, / nor any monster or thing of horror, / but only a little Mermaid lying fast asleep.

漁師は「心」「魂」「肉体」のあいだで引き裂かれ、アイデンティティはこの3連構造を共有していることが示される。主題的に見れば、物語は人魚に対する漁師の愛と、魂、肉体、心の分離と3者が統合される結末とに分割されている。第3の次元を浸透させることにより、ワイルドは2項対立を避け、物語に神秘的で悩ましい意味合いを吹き込んでいるのだ。⁹⁾

「三びきの子ブタ」や「三まいの羽」に現れる「3」という数字について、「昔話の中の三という数は、しばしば、精神分析でいう心の三つの面—エス、自我、超自我—を表しているように見える」¹⁰⁾と『昔話の魔力』の中で唱えるベッテルハイムにしたがって、次章では20世紀を代表する2人の心理学者の理論を応用しながら、「漁師とその魂」で描かれる三つ巴の争いに分析を加えたい。

6

第2章 フロイトとユングと魂

「夕暮毎に、若い漁夫は、海に出かけて行つて、網を投げ入れる」。漁師の日常は基本的にこの繰り返しであり、後に魔女との交換条件で口にする「あばらや」と海辺の往還が漁師の世界のすべてである。この変化のない、同じ調子で繰り返される閉塞状態から抜け出すことになるのは、投げた網に、偶然、人魚がかかったからであるが、運命が変わるのは人魚だけではなく漁師も同じである。文字どおり網にかかったのは人魚であるが、逆説的に言えば、人魚との出逢いという運命の網にか

かったのが漁師なのである。視点を変えると、描かれる情景の意味が、一気に反転する作品である。

ところで、第1章の引用部分は、一人の漁師の何の変哲も無い日常世界と、そこに接して存在する非日常世界との往還を描いた冒険の物語の端緒とすることができるが、そこで描かれる「日常」とは、その日の糧を稼ぐ必要に迫られた、つまり経済原則に支配された漁の行為に、また、「非日常」は、漁師が逃がすことの交換条件として命じた歌唱によって魚が捕獲でき、経済原則をあっさり乗り越える魔法が表している。人魚との遭遇は「日常」と「非日常」の境界線の越境であり、2つの世界が交わる漁場に現れる人魚そのものも、人と魚が重なったふたなりの風貌を備えている。

人魚と出会う前の漁師は、自分の世界に充足し、「あれか、これか」の実存的判断を迫られることのない充足した世界に安住していた。それが人魚との出会いによって、無自覚だった自分の世界を意識化してゆくことになる。たとえ人魚と出会っても、毎夕、同じ所に行って魚を提供されるだけでは、経済原則に縛られた世界に変化はないが、漁師は人魚を愛することで、もう一つの世界と向き合うことになる。つまり、人魚と暮らすために人間の証である「魂」を捨てることを迫られるのである。「魂」を捨てること。この行為を迫られることによって、漁師は「魂」の本質に思いをめぐらし、同時に、自分の置かれた世界を新たな眼差しで捉え直すことになってゆく。そこに付置されるのはもう一つの世界であり、安住していた世界と新世界の「あれか、これか」の価値判断に戸惑う漁師は、日常を司る正統な宗教を代表する牧師に、その判断のための助言をおおぐのが続いた展開である。

以下、価値判断を迫る場面が目まぐるしく登場するこの作品を解釈するために、近年の研究の主流の一つである精神分析的研究を紹介するが、まずはフロイト派の理論に立脚した「漁師とその魂」と無意識」と題された論文の一節に注目しよう。

「漁師と魂」の理論は、フロイトの快感原則の考えに類似している。つまり、この場合、超自我に顕現されている外部の法則とイドの本能的熱情のあいだの永遠の争いを、自我が収束しようとしているのである。この物語の中の美は、明瞭な価値あるものとしてだけではなく、明瞭でないエロチックなものへとつながる門戸として肉体的に形象化されており、象牙の体や銀と真珠の尾は漁師に欲望を喚起させる。

・・・(中略)・・・

物語の冒頭のマテリアリズムとエロシズムは分けることができない。もっと魚が捕れるように、漁師が人魚に歌いに来させる取り引きは、両者のロマンスの始まりを示している。人魚の海底の王国に入るために自分の魂を捨てようとするとき、漁師は、少なくとも自分にとって魂は実質的価値がまったくないことに気付いて当惑する。「一體、俺の魂は俺に取ってどんな用をすといふのだ？俺は魂を見ることも出来ない。魂は觸ることも出来ない。魂を知ること出来ない。」この時点での肉体と魂の二元性は、エロスの中につくられた快感原則と経済の中につくられた現実原則のあいだの二元性である。魂はまだ実態化していないが、漁師は不要な衣服のように売却か譲渡を望んでいる。

・・・(中略)・・・

人魚の肉体的魅力を通じて漁師は生を経験し、ワイルドが後に主張するとおり、愛する能力を高めるのである。一方、魂は肉体から形而上的に分離し、身体性と対峙する敵役となる。もし、牧師が宗教的用語で言うように、魂は神聖な存在として定められていて、罪のある身体と対峙するように位置づけられているとしたら、精神分析用語で言う肉体のイドは、魂の超自我に対抗する位置づけで、関係が反転しており、不道徳なのは超自我で、善の性質を持つのはイドということ

になる。¹¹⁾

ここで使われている精神分析用語は、意識の3層構造を構成する「イド」「自我」「超自我」や、「快感原則」「エロス」など、敢えて説明を要しない極めて基本的なフロイトの基本概念であり、曲解もされずに、漁師の精神が図式的に分析されている。引用の最後にあるように、宗教的な価値判断を下す番人であり検閲者でもある牧師の主張とは裏腹に、高潔な魂＝イドの道徳性が汚れて悪事を賞揚し、魂が「形而上的に」離脱した後の肉体がイドと化して、人魚に対する愛という生への肯定的エネルギーで充溢されるという解釈は興味深い。

また、ジャック・ザイプスは『おとぎ話の社会史』のなかで、「魂を持つために、皮肉にも、自分の魂を貴族階級やブルジョワ階級に売り渡さねばならない」登場人物を描いたアンデルセンの人魚姫は、自己否定と自己否定の合理化を経て「自我」を分裂させてゆく、と説きながら、ワイルドの作品について以下のように述べている。

「漁師とその魂」でもワイルドはやはりアンデルセンの物語を反転させている。その物語とは「人魚姫」である。人魚姫が不具にされ、屈辱を体験してまでも魂を手に入れたのに対して、ワイルドの物語は、人魚に恋をした漁師は魂を捨てる。しかしながら、漁師の超自我であり、社会の因襲をもあらわしている魂は、嫉妬深く、仕返し之机をうかがう。その魂は漁師を悪事に駆り立てるが、漁師の人魚に対する愛がとても深いため、彼は教会にも社会にも背を向けながらも、死ぬときには人魚と結ばれる。漁師の不服従は、僧侶や商人の利害に従わないことを象徴している。愛とは開放的な体験であり、「魂」に邪魔されずに自分と一体化することである。ワイルドは皮肉にも、魂を拒む男の生き方を賞揚し、彼を聖人とみなす。その敬虔な色合いと宗教的イメージによって、富める者のために苦しみを合理化しようとする正統派キリスト教のお説教の偽善性を非難しているのだ。¹²⁾

このように「自我」「超自我」の図式化で漁師の「魂」を論じるフロイト派の研究と並んで、「漁師と魂」が収録された作品集のタイトル『柘榴の家』の「柘榴」の象徴性に触れながら、魂の3回の誘惑を「集合的無意識」や「アニマ」などのユングの理論に基づいて説明する研究論文がある。

柘榴は、魂が集合的無意識の地下世界に存在していることを暗示している。(ペルセポネ神話で柘榴が地下世界を象徴していることを想起して欲しい。)魂はこの旅から戻ると、否定的な「ロゴス」である「知恵」で漁師を誘惑する。漁師は「エロス」を優先し、人魚のもとに留まる。

・・・(中略)・・・

魂は若い皇帝から「富の指輪」を手に入れた、と少なくとも漁師を誘惑する際にそう告げる。ここでの他の象徴とも結び合わせてみれば、柘榴は明らかに男性的権威、権力、貪欲を表している。この挿話の究極的象徴である指輪は、偽りの統合の象徴であり、いわば、否定的曼荼羅なのである。ふたたび、漁師は魂の誘惑を拒む。

・・・(中略)・・・

3回目は、裸足の女で誘惑され、漁師は拒否できない。すでに指摘したとおり、柘榴と同様、足は男性性と女性性を備えている。つまり、地上的で「豊穡をもたらす意味合い」と男根的で「不可思議な繁殖力を持つ力」(ユング、*Symbols of Transformation*、p.126)である。漁師にとって女の裸足は神秘的な魅力を持っており、漁師はその魅力に屈する。漁師から「心」をもらうことを

拒まれていたために完全に悪に染まった魂は、漁師と一体になる。

漁師を裸足の女のところへ連れて行く代わりに、魂は影の深み、つまり無意識の世界への3日間の旅に誘う。そこで銀の杯を盗んだり、無垢な幼子を叩いたりして、同情の精神である「エロス」の原則を汚す。3日目に「柘榴の庭」を持つ商人が魂と漁師を迎え入れる。ここでの柘榴はエロス原則を表している。商人は寛大で漁師に親切であり、客人の間に泊まらせるからである。ここでもまた魂は悪を強いる。拒否できそうもない漁師に、魂は商人を殺して金を奪えと言う。再びエロス原則が退けられ、負のロゴスが優位となる。

・・・(中略)・・・

人魚は明らかにアニマの形象であるが、漁師を無意識とつなげる助けをする代わりにエゴと無意識の分断を強制する、否定的アニマである。

・・・(中略)・・・

死んで初めて人魚は肯定的アニマとなり、漁師を無意識と結びつけて最終的な全体性をもたらしたのである。¹³⁾

フロイト流の解釈によれば、あたかも、複数の世界から1つを選択するストレス、複数の価値を天秤にかけ、「あれか、これか」の選択を迫られる抑圧が原因で見る神経症患者の夢が、魂の誘う3つの悪夢のような挿話に現れたかのようなものに対し、ユング派は、「集合的無意識」「エロス」「アニマ」から切り込む。こうした心理学的概念は、そもそもユング自身が水のイメージと結び付けて説いたものである。

水は無意識を表すために一番よく使われるシンボルである。谷の中の湖は無意識を表しているが、無意識はいわば意識の下に横たわっているので、しばしば「下意識」とも呼ばれ、その言い方には劣等な意識という不愉快な意味が込められていることも稀ではない。水とは、道の「谷の霊」、水竜—これは水と同じ性質をもつ—であり、「陰」に包まれている「陽」である。それゆえ水とは心理学的に言えば、無意識の中に沈んでしまった精神のことである。¹⁴⁾

水の中を覗きこむ者はたしかに自分自身の姿を見るのであるが、しかしまもなくその背後から生き物が浮かび上がってくる。それは魚、深みに住む無害なものである—もともと無害というのは、湖が多くの人々にとって妖怪じみていなければの話であるが、それは特別な性質をもった水中生物である。ときには水の精—人魚が漁師の網にかかる。¹⁵⁾

魚を捕る、釣ることに関するヨーロッパの文学的表象は、聖杯伝説の漁夫王を筆頭に枚挙に暇がないが、20世紀に至って、「意識」「無意識」を発見した心理学者が、自然界の水を人間の精神と結び付けて、「釣る」という行為の象徴性をこのように表現したことは極めて現代的であり、精神分析が文学作品の解釈に新たな視点をもたらしたことは周知のとおりである。「集合的無意識の諸元型について」に収められた「影は無意識の門である」の章からの上記引用箇所は、日本人の研究者も過去に注目しており、「魂の偽善性よりも、愛の至福の尊厳にプライオリティを置いているようである」¹⁶⁾と「漁師とその魂」の結末に解釈を加えているのも、そうした精神分析学を文学研究に応用した一例である。

第3章 ツアラトウストラとアニマと釣り人

われわれの無意識の中には生きている水が、すなわち自然的なものとなった^{ガイスト}精神が隠されており、そのためにわれわれの無意識は立ち騒ぐのである。天はわれわれにとって物理的な宇宙空間となり、神々の住む天国は過去の美しい思い出となってしまった。

・・・(中略)・・・

無意識との関わりはわれわれにとって生きるか死ぬかの大問題である。それは精神的に生きてゆくことができるか否かにかかわっている。先ほどの夢で示されたような経験をもった人はすべて、水底には宝があることを知り、それを引き上げようとするであろう。彼等は自分が誰かを絶対に忘れてはならないのであるから、自分の意識を金輪際失ってはならない。彼らは大地にしっかり足場を築くであろう。それによって彼らは喩えて言えば漁師になる。つまり水の中を泳いでいるものを釣鉤と網でつかまえる者となる。もし漁師が何をしているのか理解できない大馬鹿者がいたとしても、漁師自身は自分の行為の不滅の意味を見誤ることはない。というのは、魚をとるというシンボルは衰えをみせない聖杯伝説より何世紀も前から見られるものだからである。¹⁷⁾

このように、元型論の基幹をなすユング独自の「無意識」＝「水」の世界と、そこから「漁師」が「釣針と網」で「魚をとるというシンボル」が、古来から人類に継承されていることをユングは伝えており、ワイルドの「漁師とその魂」は言うに及ばず、世界各国の人魚伝説は、すべて「集合的無意識」と「人魚＝アニマ」という概念で、元型という大きな器におさまってゆく。

以下、本章では、魚を釣る行為の象徴性について更に論究を深めてゆくが、文学作品に関する言及が多いとは言えないユングにあって、比較的、よく取り上げられるニーチェの『ツアラトウストラ』の一節に登場する「釣り人」に目を向けてみたい。そこで、まず、ユングが1937年6月16日にボーリゲンで行った『ツアラトウストラ』の解釈をめぐるセミナーで、弟子たちとやりとりした以下の対話を紹介する。

ハンナ嬢 「ニーチェとツアラトウストラは一心同体です。」

ユング教授 「そうです。だからニーチェとツアラトウストラとアニマも同一としなければなりません。したがって、誰が誰と特定はできません、三者は同一だからです。少し先の段落で、彼はこう書いています。「つまり、わたしたち三者の間柄はこうなのだ。」三者とはツアラトウストラとニーチェとアニマです。では、伝統的な釣り師とは誰ですか。」

ヴォルフ嬢 「キリストです。」

ユング教授 「そうです。で、何を釣るのですか。」

シッグ夫人 「人間です。」¹⁸⁾

10 これは『ツアラトウストラかく語りき』の次の一節を踏まえてのものである。

最近わたしはそなたの目をのぞきこんだ、おお、生よ！すると、わたしには、自分が底の知れないものなかへ沈みこむかに思われた。しかし、そなたは金の釣針でわたしを引き上げた。わたしがそなたを称して底が知れないと言ったとき、そなたはあざけるように笑った。

「すべての魚どもはそういう話し方をする、」とそなたは語った。「自分たちには底がきわめられないと、底の知れないものということにしてしまう。

しかし、わたしはただ変わりやすく、荒々しいだけのこと、要するに一人の女であるにすぎず、それも徳操のある女ではない。」¹⁹⁾

『ツアラトストラかく語りき』で「神は死んだ」と宣言されたのは1885年。キリスト教信仰が大きく揺らぎ始める時代であることと重ね合わせると、「漁師とその魂」の牧師の人魚と漁師の関係に対する狭量な見方、人間の魂の崇高さに向けられた批判的な描写もうなずける。牧師の見解は、「ヨハネによる福音書」に始まる、いわゆる「神のことば」＝「ロゴス」を淵源に持つものであり、また、作品発表当時のアイルランド内部のカトリック信仰や新興中間層の問題と結び付けて理解する解釈もあるが、いずれにしても、既存の保守的正統派の宗教が衰退の兆候を示していることに変わりはない。「神のことば」＝「ロゴス」の等号に変化が兆す時代の流れにあって、ほぼ同時期の1891年に発表された「漁師とその魂」も、そうした時代精神を共有しているものであり、絶対的「ロゴス」に代わって「エロス」の原理が始動する兆候として、上記の『ツアラトストラかく語りき』引用部分に登場する、釣り上げられた存在に注目するのも興味深いであろう。

もっとも、既述したように、この短編は伝統的なおとぎ話の繰り返しや秘数「3」の様式に従っており、そうした規範的論理性は「ロゴス」の肯定的側面であることから、単純に「ロゴス」否定の作品とは言えない。同様に、人魚が体現する「アニマ」の「エロス」も漁師の生を活性化する肯定面のみならず、肉体と精神の分断を誘発する否定的側面を備え持つ存在であるため、複雑である。

ところで、「社会主義の確立から生じる主な利点は、疑いもなく、現状では、十中八、九までの人間をあれほどきびしく攻めたてるあの他人のために生きるというさもしい必要からわれわれを救ってくれるという事実である」と冒頭から愛他主義を批判し、独自の個人主義理論を標榜してみせる「社会主義下の人間の魂」(*The Soul of Man under the Socialism*)は「漁師とその魂」と同じ1891年の刊行であるが、ワイルドは以下のような比喻を使って、理想的な人間のすがたを言い表しており、ここでも「海へ網を投げる漁師」が登場することは看過できない。

こうしてキリスト教信者の人生を送ろうとする者とは完全かつ絶対に自己自身であるところの人間なのである。かれは大詩人、もしくは大科学者であるかもしれない。若い大学生、もしくは荒野で羊の番をしている男、もしくはシェイクスピアのような劇作家か、スピノーザのような、神について考える思想家、もしくは庭で遊ぶ子供か、海へ網を投げる漁師かもしれない。それが誰であろうと問題ではない、かれが自己の内にある魂の完成を実現するかぎり。²⁰⁾

おわりに

「どんな映画にすべきか考えて、グレゴリー夫人の『アイルランドの民話』を読んでみたのです。それから、愛読していたオスカー・ワイルドのおとぎ話も読みました。ワイルドはアラビアの漁師と人魚の、とても奇妙な物語を書いていました。それで、海から釣り出された女をめぐるこの小編を女の正体は分からないという設定で語ってみようと思ったのです。アニーという少女が記録保管人としての私の立場を引き受け解釈を加えるのです。」²¹⁾

ヨーロッパの童話「赤ずきん」を元にした『狼の血族』の監督としても知られるアルランドの映像作家、ニール・ジョーダン (Neil Jordan, 1950～) は、『オンディーヌ 海辺の恋人』(*Ondine*, 2009) の制作にあたり、あるインタビューで上記のように答えている。世界各地に遍く伝播している人魚伝説は、古代からの悠久の歴史を誇り、遺跡のレリーフ、民間伝承、童話、アニメーション

など多岐にわたる文化的媒体にその姿を留めており、映画もけっしてその例外では無い。また、人魚をめぐるエピソードとその容姿は、物語を醸成する文化圏の情報が盛り込まれ、時代によっても一様ではない伝説が生まれることになる。

ところで、ジョーダンの言う「オスカー・ワイルドのおとぎ話」とは「漁師とその魂」を指していると考えられるが、その「漁師」が「アラビア人」であるとは、1つの解釈にすぎない。おとぎ話 (fairy tale) である「漁師とその魂」のテキストでは、近代的な写実小説のような克明な国や時代設定の描写がされていないからである。したがって、アラブ系でないとは断定することもできない。実際、最近出版されたこの作品の挿絵入り絵本では、「漁師」の姿は明らかにアラブ系であることが見て取れる。「漁師」の人種特定もそれなりに興味が尽きないとは言え、重要なのは、現在の創作意欲旺盛な映像作家が、この古来からの伝承をモチーフに、新たな伝説を誕生させようとしたことである。つまり、「人魚」の物語は、今現在でも魅力に満ち、芸術家を刺激してやまないということである。

人魚が泳ぐメディアの海とは人間の意識の領海でもある。映画であれ、絵本であれ、アニメーションであれ、メディアの海は様々な形態を変えるが、そこを泳ぐ人魚＝アニマの本質に違いはない。ホメロスの『アデッセイア』に登場した水の妖精たちは、今現在も、口承文学、活字媒体、セルロイド、フィルムを経て電子媒体が切り開く「カオス」の海を泳ぎ続け、「ロゴス」の網で捕獲しようとする「釣り人」との遭遇を待っているのである。

【引用・参考文献】 文献列挙の書式はMLA方式に準拠している。

注

- 1) Isobel Murray, *Oxford World's Classics: Oscar Wilde Complete Shorter Fiction*, (Oxford: Oxford University Press, 1979), p.15.
- 2) Ian Small, 'Introduction', *Oscar Wilde, Complete Short Fiction*, (London: Penguin, 1994), p.xxiii.
- 3) Anne Markey, *Oscar Wilde's Fairy Tales: Origin and Contexts*, (Dublin: Irish Academic Press, 2011), p.168.
- 4) Oscar Wilde, 'The Fisherman and his Soul', in John Sloan (ed.), *Oxford World's Classics: Oscar Wilde Complete Shorter Stories*, (Oxford: Oxford University Press, 2010), pp.171-172.
本文中の「漁師とその魂」の引用文およびページ数表記はすべてこのテキストからのものである。下線はすべて強調のため、筆者が追加したものである。
- 5) オスカー・ワイルド『柘榴の家』本間久雄訳 (春陽堂、1917年)、pp.80-83.
「漁師とその魂」の翻訳文は、英語原文の擬古文調の雰囲気伝えるために、旧仮名遣いによる本書収録の「漁夫と人魚」から借用したが、書体や表記記号に変更を加えた箇所がある。
- 6) マックス・リュティ『昔話 その美学と人間像』小澤俊夫訳 (岩波書店、1985年)、p.167.
- 7) Walter J. Ong, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, (London: Methuen, 1982), p.64. 翻訳文は以下を借用。
ウォルター・オング『声の文化と文字の文化』桜井直文他訳 (藤原書店、1991年)、p.78.
- 8) Jarlath Killeen, *The Fairy Tales of Oscar Wilde*, (London: Ashgate, 2007), pp.150-151.
- 9) Markey, *Oscar Wilde's Fairy Tales: Origin and Contexts*, p.175. なお、文の3連構造を明瞭にするため、引用の英文にスラッシュを追加した。
- 10) Bruno Bettelheim, *The Uses of Enchantment: The Meaning and Importance in Fairy Tales*, (New York: Vintage Books, 2010), p.102. 翻訳文は以下を借用。

- ブルーノ・ベッテルハイム『昔話の魔力』波多野完治、乾侑美子訳（評論社、1978年）
- 11) Heather Marcovitch, 'The Fisherman and His Soul' and the Unconscious,' in A Giant's Garden : Special 'Fairy Tales' Issue, 2009.
<http://www.oscholars.com/TO/Specials/Tales/Fisherman_Marcovitch.htm>
- 12) Jack Zipes, *Fairy Tales and the Art of Subversion, 2nd edition*, (New York and London: Routledge, 2006), p.125. 翻訳文は以下を借用。
ジャック・ザイプス『おとぎ話の社会史 [文明化の芸術から転覆の芸術へ]』鈴木晶・木村慧子訳（新曜社、2001年）
- 13) Clifton Snider, 'On the Loom of Sorrow' : Eros and Logos in Oscar Wilde's Fairy Tales, 2009.
<<http://www.csulb.edu/~csnider/wilde.fairy.tales.html>>
- 14) C.G.ユング『元型論』林道義務訳（紀伊国屋書店、1999年）、p.46.
- 15) C.G.ユング、同上、p.48.
- 16) C.G.ユング、同上、p.48.
- 17) 松浦暢『水の妖精の系譜』（研究者出版、1995年）、p.17.
- 18) *Nietzsche's Zarathustra: Notes of the Seminar given in 1934-1939 by C.G. Jung, vol.2* (J. Jarrett, Ed.), (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1988), p.1165.
- 19) フリードリッヒ・ニーチェ『ツァラトゥストラ 上』吉沢 伝三郎訳（筑摩書房、1993年）、pp.193-194.
- 20) Oscar Wilde, 'The Soul of Man Under Socialism', 翻訳文は以下を借用。
オスカー・ワイルド『オスカー・ワイルド全集4』西村孝次訳（青土社、1989年）、p.319.
- 21) Paul McGuirk, Ondine: Reworking a Foreign Fable, An Interview with Neil Jordan, <<http://www.cineaste.com/articles/emondineem-reworking-a-foreign-fable-an-interview-with-neil-jordan>>

参考文献

- Beckson, Karl (ed.), *Oscar Wilde: The Critical Heritage* (London: and New York: Routledge, 1970).
- Beckson, Karl, *Oscar Wilde: The Oscar Wilde Encyclopedia* (New York: AMS Press, 1998).
- Bettelheim, Bruno, *The Uses of Enchantment: The Meaning and Importance in Fairy Tales*, (New York: Vintage Books, 2010).
- Jung, C.G. , *Nietzsche's Zarathustra: Notes of the Seminar given in 1934-1939 by C.G. Jung, vol.2* (J. Jarrett, Ed.), (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1988), p.1165.
- Killeen, Jarlath, *The Fairy Tales of Oscar Wilde*, (London: Ashgate, 2007).
- Marcovitch, Heather, 'The Fisherman and His Soul' and the Unconscious,' in A Giant's Garden : Special 'Fairy Tales' Issue, 2009.
<http://www.oscholars.com/TO/Specials/Tales/Fisherman_Marcovitch.htm>
- Markey, Anne, *Oscar Wilde's Fairy Tales: Origin and Contexts*, (Dublin: Irish Academic Press, 2011).
- McGuirk, paul, Ondine: Reworking a Foreign Fable, An Interview with Neil Jordan, 13
<<http://www.cineaste.com/articles/emondineem-reworking-a-foreign-fable-an-interview-with-neil-jordan>>
- Murray, Isobel, 'Introduction', *Oxford World's Classics: Oscar Wilde Complete Shorter Fiction*, (Oxford: Oxford University Press, 1979).
- Ong, Walter J, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, (London : Methuen, 1982).
- Snider, Clifton , 'On the Loom of Sorrow' : Eros and Logos in Oscar Wilde's Fairy Tales, 2009.

<<http://www.csulb.edu/~csnider/wilde.fairy.tales.html>>

Wilde, Oscar, 'The Fisherman and his Soul', in John Sloan (ed.), *Oxford World's Classics: Oscar Wilde Complete Shorter Stories*, (Oxford: Oxford University Press, 2010).

Wilde, Oscar, 'The Fisherman and his Soul', in Ian Small (ed.), *Oscar Wilde Complete Shorter Fiction*, (London: Penguin, 1994).

Zipes, Jack, *Fairy Tales and the Art of Subversion, 2nd edition*, (New York and London: Routledge, 2006).

マックス・リュティ『昔話 その美学と人間像』小澤俊夫訳（岩波書店、1985年）

松浦暢『水の妖精の系譜』（研究者出版、1995年）

フリードリッヒ・ニーチェ『ツアラトウストラ 上』吉沢伝三郎訳（筑摩書房、1993年）

小黒 康正『水的女一トボスへの船路』（九州大学出版会、2012年）

C.G. ユング『元型論』林道義務訳（紀伊国屋書店、1999年）

（受理 平成25年 1月18日）